

平野 稔

「蔵のある家」作者



私がなぜ「蔵のある家」を書こうと思ったか…と言いますと、当時母は九十三才、時々ボケ（認知症）が始まって居りました。

私が京都へ時代劇を撮りに行く時、帰路は必ず岐阜で途中下車して母の病室を訪ねると「誰方さんやね」私が判りません。少し時間がたつと「ああ、お前来てくれたんか…」私はガクゼンとします。戦後何も物の無い日本が貧乏な時代、懸命に四人の子供を育てるのに精一杯頑張つて来た母がコワレテ行く…不尚な息子は言葉も無く立ちつくします。

それで、その事で私は母の「女の一生」を書こうと決心致しました。お母さんの事書いたよ、今度岐阜でも公演するからと言うと「車椅子

に乗って見に行く…」と嬉しそうに笑顔で答えていたのに、母はその公演の見る事も無くその公演の三ヶ月前に旅立ちました。母の事を思い出しながら記録の断片を継ぎ合せた物語りでございます。役者の書いた初戯曲です。

一昨年夏、主演に有馬稲子さんを迎え、四回目の「蔵のある家」をシアターV赤坂で公演致しました。有馬さんから「週間新潮の表紙絵を描いておられる谷田六郎さんの絵の様な日本の原風景を描いた私の好きなお芝居です」と望外なお言葉を頂きました。

このお芝居を見て頂いた首都圏の演劇観賞会から人気投票で第一位を頂き、この一月と二月首都圏で17ステージ公演を致しました。それにこの「蔵のある家」が文化庁平成19年度舞台芸術の魅力発見事業に選ばれました。観劇された演劇観賞会からも良い芝居だったと喜んで頂いて



居ります。岐阜出身の皆様にも多数御観劇頂いた事、本当に本当に有難うございました。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。最後に代官山の宮本悠美女子の言葉をお借りします。「お空が見ている」私もこの言葉を信じて居ります。でも母にこの芝居を見せられなかった事今でも残念です。